

- 1 派遣期日 平成22年10月22日（金）
- 2 研修先 学校名 東京都大田区立赤松小学校
所在地 東京都大田区北千束 2-35-8
- 3 研修内容

公開授業・全体会・授業別分科会・課題別分科会・指導講話・対談
研究主題 未来を拓く子どもたち ～ひろがれ！確かな「学び」の創造～

（1）公開授業参観

- 第2学年・生活科 指導者 松井 美鈴 先生
- 単元名 『つたえたいな こんなこと ～町のお年よりを交流給食にご招待しよう』
（新学習指導要領 内容（8）生活や出来事の交流）
- 本時のねらい

おじいさん おばあさんに よろこんでもらえる 交りゅう思い出プレゼントを作ろう

まず、「思い出ブック」「思い出アルバム」「思い出カレンダー」などのプレゼントを作る際に、どんな工夫をしたら喜ばれるかを話し合った。児童からは、形や飾りなどの見た目の工夫や、「楽しかったエピソードを入れる」などの内容の工夫だけでなく、「気持ちをこめて作る」「やさしいことばを書く」といった心構えについての発言まで出された。教師は、出された意見を色分けしながら分類し、黒板いっぱいには張っていった。

作りたいプレゼントごとにグループを作り、思い思いに作成を始めた。事前に作りたいものがイメージできていたようで、躊躇せずどんどん作っていた。また、装飾に使う小物を準備している子も多く、自分らしく作ろうとする意欲に満ちていた。以前に交流したときの写真が一人一人に5～6枚配られており、それを貼り付けたり、写真を見ながら出来事を思い出したりできて効果的であった。「思い出カレンダー」グループの一人が、曜日を意識せず日付を書き並べて作ろうとしていた。教師は、「こんなふうに作りたいだね。」と肯定的に受け止めながら、友達の作品を見せたり、おじいさんたちの使いやすさを考えさせたりし、そのアドバイスを入れて児童も書き直しをしていた。

学習の最後に、自分や友達の工夫について学習カードに書き、発表し合った。友達のよさを認め合う発言が多く、次時につながる意欲をもって終わることができていた。

（2）基調提案

「未来を拓く子どもたち」に必要な力を、「学んだ知識や技能を活用する力」「他者と協同する力」「自律的に行動する力」の3点とし、その力をバランスよく身に付けさせるために、「カリキュラム」「言語」「協同・かかわり」「思考・気付き」「評価」の5つの視点を設定して研究を進めた

（3）授業別分科会

- 身近な人々と伝え合う活動に重点をおいて行うことで、他者とかかわることの楽しさが分かり、さらに多くの人と交流していこうとする子どもの姿を目指した。
- 地域のお年寄りと繰り返しかかわる中で高まった気付きを、共有化することで更に高め合っていけるように活動を工夫した。

(4) 課題別分科会

『豊かな体験を通して、言葉での表現を深める』

発表者 東京都足立区立弘道小学校 小辻 美智恵 教諭

○年間を通した季節単元を活用した「豊かな体験」づくり

「フィールドビンゴ」「おはつ探し」「あきのひとりごと」「ふゆとなかよしかるた」等

○体験と表現をつなぐ手立ての整理

積極的に子どもと対話することで、子どもの体験した出来事を思い出したり振り返ったりさせることが大切である。子どもに「問い返し」をすることで、たくさんのことを思い出したり振り返ったりすることができる。

○国語の学習と関連をもたせることで、子どもに無理のない学習となった。

(5) 指導講話・対談

「これからの生活科・総合的な学習の時間で育つ子どもたち」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 田村 学 先生

文教大学教育学部教授 嶋野 道弘 先生

○教師と子ども、子どもと子どものかかわりが見えた授業だった。

○「気付き」とは、対象に対する一人一人の認識であり、体験の充実こそが、気付きの質を高める。「一人一人みんな違うんだ」という考えの変革が必要。

○今回、生活科の学習指導要領の改訂では、「変えること」と「変えないこと（不易）」を明確にした。

○知的な発見だけでなく、情意的な発見が生活科には必要。生活科では、「科学的、理科的考え方の基礎を養う」という観点から、自然の不思議さや面白さを実感することを求めている。しかし、「科学的、理科的」という言葉にとらわれすぎてはいけない。実感が大事。

○気付きの質を高めることに集中して、生活科の本質を忘れないようにしてほしい。

4 感想

公開授業の参観と分科会では、子どもが地域のお年寄りとかかわっていくプロセスをととても大切に扱っていることが印象的だった。子どもたちは、お年寄りと繰り返し交流をすることで、伝えたい自分の気持ちが明確になり、自分らしい表現方法で意欲的に取り組んでいた。

課題別分科会では、他教科と関連づけて単元構成をし、年間を通して継続的に取り組んだ実践が発表された。季節感を大切にしたい、見通しのはっきりした取り組みだと感じた。また、教師の言葉かけについて、賞賛や価値づけにとどまらず子どもの自己内対話の力を育てる「問い返し」が大事であるという点がとても参考になった。豊かな体験が表現の深まりに結びつくように、教師が、対象と結び付け、他者と結び付け、自分と結び付けて問い返しをすることで、子どもはしだいに自ら問い返しをし、体験を振り返りながら表現できるようになる。ぜひ実践していきたいと思った。

指導講話では、生活科が「科学的・理科的」という言葉にとらわれすぎてはいけないということ、情意的な側面を大事にしていくということを明確に話されていた。今後の指導に生かしていきたい。